

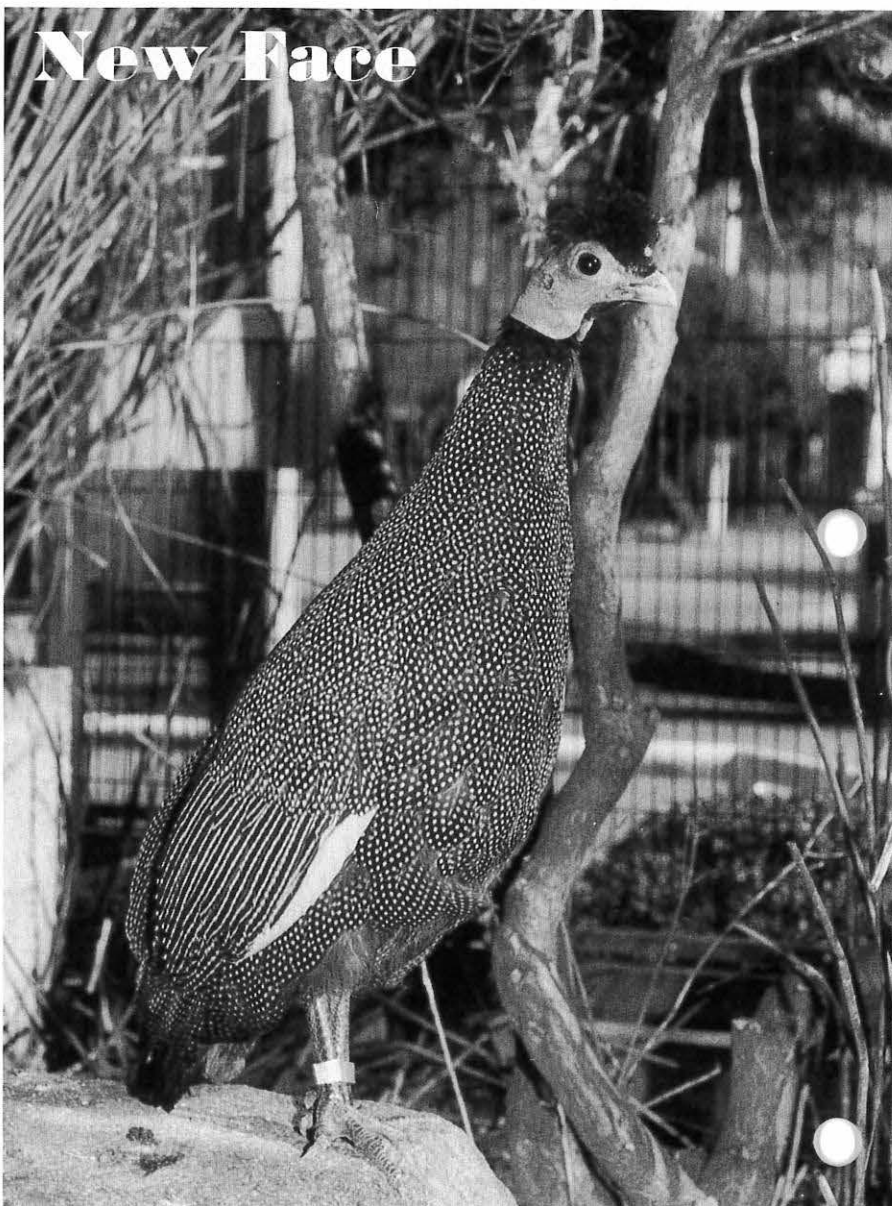


# なきごえ



1993

2



# New Face

(撮影：野口 秀高)

## もくじ

- 2 New Face 酉年の新顔、ケニアカンムリホロホロチョウ
- 3 動物と私 夢を大切に (中川尚史)
- カバーウォッチング ミナミヤイロチョウ
- 4 北海道の野生動物たち 上 (森田謙一)
- 6 コアラの母子関係 (早川 篤)
- 8 グラフZOO 私は誰〜れ?
- 10 ケンチャンの好きやねん動物園 (松葉 健)
- 11 ZOO DIARY

## カバーウォッチング

ミナミヤイロチョウ  
スズメ目ヤイロチョウ科  
*Pitta moluccensis*  
中国南東部から東南アジアに分布する鳥で、その名のとおり色どりが多彩です。雌雄同色で、日本に夏鳥として渡ってくるヤイロチョウとは別種です。

(撮影：宮下 実)

# |||||| 動物と私 |||||

## 夢を大切に

子供の頃は、誰しも夢を抱いています。将来は、動物学者や獣医さん、あるいは動物園の飼育係になりたい、と思っている人も少なくはないでしょう。「なきごえ」の読者であるみなさんも、きっとそのひとりであるはず。実は、私も小学校4年の頃から、「野生の王国」というテレビ番組がきっかけで、無類の動物好きになってしまったひとりです。今でこそ動物番組は数多く、内容も多彩ですが、当時は野生動物としては映像になりやすい、アフリカのサバンナの動物たちを対象にしたものが主でした。その印象があまりにも強烈だったので、この時から私の夢は、「アフリカのサバンナで大型哺乳類の研究をすること」、とかなり具体的にかたまったのです。

当時、豊中市に住んでいた私は、天王寺動物園をはじめ、親にせがんでいろいろな動物園に連れていってもらいながら、動物に関する本をみたり読んだりして子供ながらに勉強するようになりました。しかし、どうすれば自分の夢をかなえられるのかは、今ほど情報もなく分かりませんでした。ただ、そうこうするうちに、京都大学がア



中川尚史 さん  
(シオン短期大学助教授)

フリカで霊長類の研究をしていることを知りました。京大へ入ればアフリカへ行けると信じ、1年の浪人生活ののちなんとか入学を果たしました。入学した年の夏休みには、ただの観光旅行でしたが初めてアフリカの地を踏むことができましたし、ほかにも学部生の間は、野生動物を見るために、沖縄から北海道までいろんなところを歩き回って、フィールドワークの実践経験を積みました。やがて、理学部の大学院に入学し、いよいよ霊長類学の道に足を踏み入れることになりました。しかし、まだずぶの素人の私が、すぐにアフリカに行けるわけがありません。まずは、宮城県金華山のニホンザルを対象に、研究のノウハウを学ぶことから始め、その成果をなんとか修士論文にまとめることができました。そして、博士課程に入って1年目、いよいよアフリカでの調査の機会を与えられました。しかも、憧れのサバンナでの調査です。運のいいことにその3年ほど前から、霊長類研究所の大沢秀行先生が、サバンナに住む霊長類の1種、パタスザルの調査を開始されていたのです。数々の好運にも恵まれて、こうして私は16年目にして、夢をかなえることができました。

ここで私がみなさんに伝えたかったのは、私の経歴でも苦労話でもなく、幼い頃の夢を大切にしたいということです。もちろん、現実には厳しいこともあります。しかし、あきらめる前に今一度頑張ってみてはどうでしょうか。意外とうまくいくかもしれませんよ。多くの動物が絶滅の危機に瀕している今、野生動物の研究や保護のために働く、できるだけ多くの人々の力が必要なのです。私もこれまでの教えられる立場から、短大に就職し教える立場になったこともあり、野生動物のおもしろさを伝えていく必要を感じています。

(なかがわ なおふみ)

## 酉年の新顔 ケニアカンムリホロホロチョウ

キジ目  
キジ科

酉年をひかえた昨年末に数種のキジ類がキジ舎にお目見えしました。その中で黒地に白の斑点のある美しい羽毛と頭部の冠状のかざり羽でひととき目立っているのがこの鳥です。本種は東アフリカに生息しています。



# 北海道の野生動物たち

上 森田 謙一

（北海道保健環境部  
自然保護課 主査）

北海道は、豊かな海に囲まれ、広大な森林、広漠とした湿原、清澄な水をたたえる湖沼などが織り成す雄大な北方的景観と豊かな動植物が生息・生育する良好な自然環境に恵まれていることから、居住地周辺の身近な自然においても、各種の動物に接する機会があります。

しかしながら、野生動物の生息環境に比較的恵まれている北海道においても、開発に伴う野生動物の生息域の縮小や生息環境の変化等により、減少傾向の著しい鳥獣があります。

環境庁は、わが国で絶滅が心配される種等についてリストアップして、「レッドデータブック」を作成し、保護の指針としています。

さて、北海道庁には、自然保護課、さらに14の支庁には自然保護係があり、各種の野生生物の保護管理や傷病鳥獣対策等の業務を行っています。

また「北海道環境科学研究センター」の自然環境部が、野生動物の保護管理の基礎資料を得るため、哺乳類・鳥類を中心に、調査研究を実施しています。

そこで、調査研究の結果も織混ぜながら、北海道に生息する哺乳類・鳥類について解説して行きたいと思えます。

## （1）哺乳類について

### ①ヒグマ

ヒグマは日本最大の地上食肉類であり古くから「キンカムイ」として崇められており、北海道の豊かな自然のシンボルであるが、その実態は意外に知られていません。

ヒグマは肉食動物に属しており、一般のイメージは、他の動物を襲って食べているように思われております。実際、人・家畜等に対して被害をおよぼすこともあります。その食生活の実態はほとんど草食獣に近いのです。

北海道内で有害駆除（人命等に危険がある時などに特別に許可される駆除）で捕獲されたヒグマの胃内容物を環境科学研究センターが分析した結果によりますと、彼らはきわめて植物食に偏った雑食性動物であり、春にはセリ科の草本、夏には大型のフキ、秋にはドングリ等の木の実やヤマブドウ等を食べているようです。

しかし、近年ドングリ等とともに秋の大切な食物であったサケ・マスは、北海道のほとんどのサケ・マス遡上河川で人工孵化事業を実施したためクマが補食出来なくなりました。

しかし、昨年度から、道内の数河川において、ヒグマとシマフクロウのためにサケ・マスを遡上させることとし、新聞・テレビで、「クマの木彫り」で有名な「サケをとるヒグマの姿」が久しぶりに見ることができました。これも自然保護の小さな一歩であろうかと思えます。



ヒグマ（大雪山にての調査時）

さて、ヒグマは北国の厳しい冬を乗り切るため、冬眠をしますが、大型哺乳類で冬眠するのはクマの仲間だけです。しかし、ヒグマの冬眠は、体温・脈拍をわずかに低下させているだけで、刺激があれば起きてしまいます。また、冬眠はヒグマの繁殖の上でも重要です。ヒグマは単独生活をしていますが、5月から7月の1時期だけつがいを作ります。普通の動物では、受精した卵は子宮内に着床して出産まで発育しますが、ヒグマは受精卵が子宮内に浮遊したままで発育を停止してしまい、受精卵は11月下旬になって着床して発育を再開します。そして、冬眠中の1月下旬から2月上旬に出産します。実質的な妊娠期間はわずか2か月あまりで、仔グマは体重400グラム前後で生まれてきます。まさに小さく産んで大きく育てます。

ヒグマは、「レッドデータブック」の保護に留意すべき地域個体群として、「北海道西部のエゾヒグマ」が指定されています。これは、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているか、その危険が増大している場合に指定されます。本州のツキノワグマも同じような状況の地域があります。

環境科学研究センターのテレメーター調査（ヒグマを捕獲し電波発信機を装着して、ヒグマの行動等を観察する調査）、ヘリコプターによる現地調査等により、平成10年までに全道のヒグマの個体数を出す予定ですが、現在までの調査で、個体数はまだ確定できてはいませんが、減少傾向にあるのではないかと思います。

しかし、他の減少傾向にある野生動物と違い、ヒグマは人畜に危害を与える場合があります。例えば、ヒグマの生息域に立ち入った人間を襲った

り、人家近くに出没し、我々人間に恐怖心を与えたり農作物や家畜に被害を与えたりします。近年、人間を襲ったりする事件は減少していますが、人家近くに出没する件数が増加しています。これは、屋外に放置された生ゴミ等の味をヒグマが覚え、その結果として餌を求め、何度も人家近くに出没するのです。このよい例が、1986年に羅臼町で起きたヒグマの家屋侵入事件であります。この事件も、家の裏庭に生ゴミを捨てており、そのゴミにクマがいつき、そうしているうちに家の中に侵入され、冷蔵庫まで荒らされることとなったのです。昨年9月には、大雪山系の旅館にヒグマが現れ、幸い事故はありませんでしたが、多くの登山客に恐怖心を与えました。この時は、旅館の裏にある焼却炉を物色していたとのことでした。

これらのことから御理解いただきたいのは、いろいろなアウトドアライフを楽しむ機会も多いと思いますが、ゴミは必ず持ち帰るようにしてほしいということです。これは、北海道だけの問題ではありません。

ゴミを持ち帰ることが、野生動物を人間に必要な以上に近づけることなく、自然保護に協力しているとの認識を持ってください。

このように、ヒグマに関してはいろいろな問題がありますが、ヒグマは減少していると思われず。そこで、北海道では、春のヒグマ一斉駆除を平成2年に廃止したり、全国的には、クマの捕獲制限も検討されようとしています。

### ②エゾシカ

野生動物の問題というのは、絶滅の危機に瀕しているものだけではありません。

エゾシカは平成3年度の農林業被害が23億円を突破し、また交通事故、列車事故等が増加し、いろいろな問題がおきています。

偶蹄類の個体数の増減について、ニュージーランドのライニー氏は、偶蹄類が新たな環境に適應する課程で、4つの異なる相を経る一連の爆発的振動モデルを提案しています。

第1段階は、餌が豊富なために環境と現存の生息数との差に反応し、死亡率が低く生産率が高いために著しく個体数が増加する。

第2段階では、個体数がピークに達して環境収容力を越え、植生が破壊される。体調は厳しい季節（冬）に悪化する。

第3段階には、個体数が減少し始める。個体群の崩壊は、通常厳しい冬に起こる。体調は急速に悪化し、崩壊期の初期には最悪となる。

最終段階は、改変された植生で調査された新しい環境収容力に見合った、ピークよりも低密度で安定する。このように低密度で安定した個体群であっても、再び環境収容力が増加した場合、将来爆発的増加する可能性があると警告しています。

ライニー氏の提案の実例が、北海道洞爺湖中島に見ることができます。洞爺湖中島には1957年に

成獣オス、58年1歳メス、65年に妊娠メスの合計3頭が持ち込まれ、25年後の1983年秋には約300頭とピークに達し、よく冬、個体群の崩壊が起こり、67頭が自然死亡しました。また84年5月までに合計95頭が間引き（島外の他の場所に移された。）され、推定生息数は137頭となりました。その後、生息数は増加することなく低密度で安定したまま今日にいたっています。このように、中島のシカの個体群の変動課程は、ライニーの示した典型的な導入個体群の爆発的振動をたどりました。

このことは、環境科学研究センターが毎年調査を行い、確認されています。



エゾシカ（洞爺湖中島調査時）

次に北海道全域について考えますと、明治の開拓以前には、多くのエゾシカが生息していましたが、乱獲と生息環境の変化、とりわけ1879年と1903年の大雪が生息数を減少させ、一時は絶滅に瀕しました。

その後の保護政策等により次第に生息数が回復し、10年程前から北海道東部地域を中心としてエゾシカの姿をよく見かけるようになりました。

この項の最初にも述べましたように、北海道では今、膨大な農林業被害が発生しており、シカの生息数が問題になっております。

そこで、環境科学研究センターが中心となり、各種の地上調査や、ヘリコプター等を使い、空からも個体数の概数を決定するための調査を実施しています。

この結果をもとに、エゾシカを保護管理するシステムを早急に作り、人とエゾシカの共存と自然環境の保全を実現させなければなりません。

自動車で北海道を走ってますと、「動物に注意」という交通標識等を、各地でよく見かけます。それだけエゾシカが、道路を頻りに横切るようです。最近、エゾシカが急に道路へ飛び出し、これを避けようとして起きたと思われる死亡交通事故がありました。北海道を車で旅行される時は、ぜひ、車のスピードは控えめに、野生動物の道路への飛び出しには十分注意してください。 つづく

（もりた けんいち）

# コアラの母子関係

**動**物の子育てという皆さんはどんなイメージを持つのでしょうか。私は飼育係になる以前には、親が自らの命に代えても子を育てようとする献身的な親の愛情によって成立しているものだと考えていました。しかし、いろいろな動物の子育てを見ているとどうもそのイメージとはちょっと違うという場面に出会うことができました。

キジのヒナが親や兄弟につつかれて殺されたり、ワライカワセミでは巢外に落ちてしまったのか、それともほうり出されたのか、やはり死んでしまったヒナがいましたが、親は気にもしていない様子でした。これらの事件が異常行動なのか、何らかの意志が働いているのか、因果関係は理解できなかったのですが……。

野外観察においても、いろいろな動物で子殺しや兄弟殺しの現場が観察され、種によってはその行動のもつ意味も解明されています。どうも子育ての背景には、親の繁殖戦略や子の生き残り戦略があるようです。自然淘汰の厳しい世界に生きる動物達の子育てという行動の中には、人間のそれとは少し違うものがありそうです。

草食動物のように、生まれてすぐに歩けるような子は別として、生まれたての子は親の保護を必要とします。コアラの場合、袋から出てきた子はしっかりと母にしがみついています。当然、この時点から母子の接触が始まりますが、やがて親から離れる日が来ます。子はその日まで親の保護を充分に受けることができますが、1mでも親から

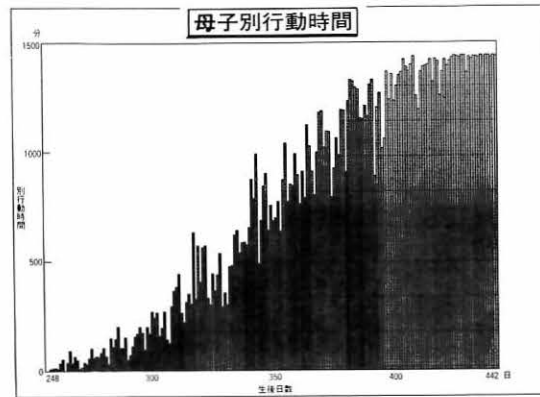
離れてしまうとそこにはたくさんの危険が待ちうけることとなります。子にとってはこの日から自然の中でまた種の一員として一人前になるための生活が始まるわけですから。

**今**回は、コアラの母子関係を、子が独立するまでの母子間の接触の仕方を調べることから考えてみたいと思います。

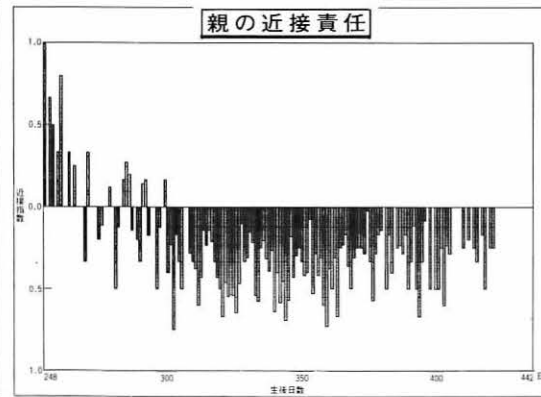
調査個体は、母が“ミドリ”で子が“ミク”です。“ミク”の出産までの経過は、1992年6月号で紹介したので今回は、はぶくことにします。調査方法は、タイムラプスビデオにより親子の行動を24時間録画し、母子が離れたり近づいたりする行動を、どちらの動きによってなされたのか、そしてその時間を記録しました。集まったデータを1日単位で集計し、別行動時間(1日のうち母子が離れていた時間)をグラフ1に、母の近接の責任をグラフ2に現わしました。

母の近接の責任とは、わかりやすく言うと母子が離れている状態は危険を伴うため、一緒にいることが母の責任(役割)であるとしています。そこで母子が離れたり近づいたりする回数をもとに計算し、+1.0~-1.0の間の指数としました。そして、+1.0とは一緒にいるためには完全に母が責任を果たしている場合であり、-1.0は逆に子の責任によるという状態が保たれるということを示わしているということです。つまり+1.0に近いほど母の近接の責任は大きくなり-1.0に近づくほど少なくなるというわけです。調査期間は、別行動が初めて観

グラフ1



グラフ2



察された1992年3月30日(248日齢)から、10月10日(442日齢)までの195日間でした。

**結**果は、別行動時間は日を追うに従って延び、400日齢頃には、1日中ほとんど離れて過ごすようになりました。母の近接責任は、子の成長に従って少なくなってきています。267日齢までは指数は十に片寄り責任は母により多くかかっています。その後300日齢までの間では、母と子の責任が日によって入れ換わり、300日齢以降は、母により多く責任のかかる日は全くなくなりました。

さて、この結果をどう解釈すればよいのでしょうか。母子の行動観察とあわせて見ることにしましょう。228日齢で袋に戻らなくなった子は、移動時には母の腹部や背中にしがみついていた。食事はパップ(母親の特殊な糞で、コアラの離乳食となるもの)と母乳のみですが、237日齢でユーカリの葉を口にするのが観察されています。親が採食していれば自然と子の目の前にユーカリがちらついています。そのユーカリに口をもって食べているわけですから、手は使っていません。手を使い始めるのは248日齢からでした。

採食のために、自分の口元に葉を引き寄せるといことは、子にとって簡単なことではないようです。葉と自分との距離を正確に測り、手を伸ばし枝をにぎるため指を動かすという一連の行動が必要なのですから。この時期と単独行動を始める時期が一致しています。このことから、単独行動と枝をつかめるようになることに何らかの関連があるように考えられます。

母の体を移動するには、ただ手を伸ばしギョッとにぎりさえすれば落ちる心配はありません。でも、枝を移動するとすれば、太い所や細い所や曲がった所があるかもしれません。正確に自分の目で判断して進む必要があります。

では何故、子は短かい時間とはいえ単独行動を始めるのでしょうか。親から一歩でも離ればそこにはたくさんの危険が待っていると考えられるのですが……。

単独行動が始まった当初の期間は、移動のための練習期と考えてみてよいでしょう。何か目的があって移動するのでもなく、時間も1日あたり10~15分で回数は1~7回です。近接責任も十に片寄っており、母の保護下にあるといえるでしょう。練習期と書きましたが、ただ移動するためだけに練習をするとは考えられません。

**26**4日齢に移転先で採食するのが観察されています。この日以降、別行動時間が増えていきました。つまり移動がある程度スムーズに行えるようになったら、自由に採食ができるようになったのです。では、この頃の母子関係をみてみましょう。採食のため親から離れた子は、食べ終わると親の所に帰って行きます。指数では0というわけですが、母が地面に降りる際には、子に近づき一緒に降ります。降りるといことは自然状態では、次に木に登った時に別々になる可能性があるわけ

ですから、子を保護するためには必ず一緒に行動しなくてはなりません。つまり親の責任は十に傾きます。親は降りる時以外は、子に近づきませんから責任は一に傾きます。

300日齢までは指数が十と一の間を示していますが、この時期には子の自由な行動が認められているとはいえ、やはり親の保護下にあるといえます。

298日齢の時、親が雄の鳴声に反応して耳をパタパタとする行動が観察されました。これは発情時に必ず見られる行動です。301日齢で母のみ降りるのが観察されました。これ以降、母は降りる時も子を連れに行くことはありませんでした。309日齢では、それまで寝る時は必ず母と一緒に寝た子が27分間ですが単独で寝ています。しかし、ほとんどの場合寝る時には母の所に戻ってきます。

**さ**て、300日齢まで十と一を移動した指数が一に片寄り始めた頃には母子関係はどうなったのでしょうか。まず一になるというのは、親が離れていく回数が多く近づくことは少ないということです。寝る時は一緒にですから、当然子が近づくと親の保護を求めているといえるでしょう。それまで、子を保護下においていた親の行動に変化があったようです。母のみ降りる行動やオスの声を気にするなど、それまでには見られなかったことでもあり、親として子育てを終了したことを示唆することかもしれません。とすると、この時点で母はいわゆる子離れをしたことになるでしょう。でも、子にしてみれば、まだ一人立ちするには不安もあるし、親といるのが一番安全な手段ですから、哺乳や睡眠時には親の保護を求めにくることなのでしょう。

やがて、子も独立に向かい435日齢以降は指数がありません。つまり近接がみられなくなりました。

こうしてみると子が親から離れていくまでの親子関係も、実は子が自由な運動能力を備えると共に、親の保護責任(役割)は少なくなり親が自主的に行動を始め、今度は子が親に保護を求めにいきやがて子により独立(母子関係の終了)がなされていくというもののようです。

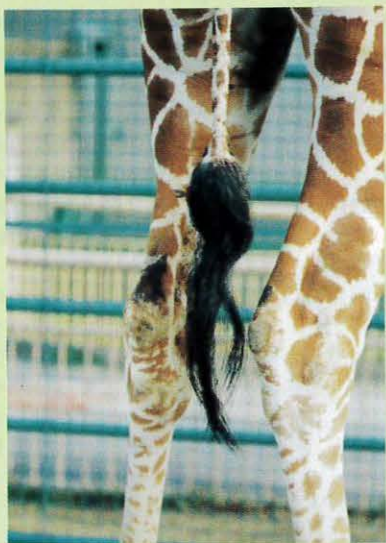
**今**回は、誌面の都合で音声による親子のコミュニケーションやユーカリに対しての子の選択性の問題や育児期の教育について等書けませんでした。動物の子育ての中味はもっと深そうまだまだ理解しきれないというのが正直な所です。

動物園で親子の展示は、人気があり楽しい気持ちにさせてくれます。でも親子の姿やしぐさだけではなく、“子育て”という行動を展示にできないものかと考えていますが、何かいい方法はないのでしょうか。

なお、データ収集のためのビデオ解析には筆者のほか、コアラ飼育担当の野口秀高、土谷正道があたりました。(飼育課:早川 篤)



天王寺動物園のキリン一家です。右がメスのサキコ、左がメスのハルミ、首を出しているのがオスのナガヤです。この他、タカサブロウとナルミという2頭の赤ちゃんキリンもいますよ。



しっぽの先にはこんなに長い毛がはえているんですよ。何の役に立つのでしょうか。



これでもうわかったでしょうね。それにしてもきれいな模様ですね。



角もありますが、毛がはえているんですよ。



こんなに長〜い舌をしています。それに前の方は黒いんですね。もうわかったかな？



耳はラッパの口のような形で、とてもよく聞えそうです。それに毛がいっぱい生えていますね。



目です。とても長いまつげをしています。強いアフリカの日差しを防ぐ効果があるのでしょうか。



ヒツメです。二つに分れていてウシと同じですね。

# グランドZOO

## 私は誰〜れ？

ある動物の体の部分をアップにしてみました。どんな動物かわかりますか？よく動物園に来る人にはすぐわかってしまうでしょうね。でも新しい発見があるかも知れませんよ。

(撮影・構成：長瀬健二郎)

# ケンちゃんの子きやねん動物園 マンガ 松葉 健

動物園で一番大きな象さんの生活を見せ  
てもらいにいきました。その日は10日に1回、屋外  
プールの掃除をする日でした。飼育係の人が  
5、6人で、ほうきで掃いたりホースで水を流したり、ブラシで  
洗ったり、手わけして、あっという間にきれいになりました。



いまこの象舎には3頭います(メスばかり)  
2頭は、タイから昭和25年にきました。あとの  
1頭は大阪万国博の88年45年にインドからきた  
そうです。係の人が餌を与えたり、ウンチの後  
始末をするのを模倣で見せてもらいましたが  
ウンチの量が多いのでビックリしました。  
食べる量も多く、栄養ことも考えて与えるさ  
うです。



象さんは近くよってみるとすごく大きく  
感じます。ちょっと鼻で扉をたたいてもドーン  
とびびります。象さんに嫌われたら  
仕事ができないので...と飼育係の人は  
気を遣うそうです。なんといっても体が  
大きいので危険防止に登山用ピッケル  
のような道具をもって備えているのもそのた  
めです。強くて大きい象さんは小さく  
やさしい眼をしていました。



朝9時には屋外へ出た象さんは夕方4時に舎の  
中に入ります。朝食と昼食は外で、夕食は中で  
食べるようです。メニューは(朝)1頭につき青草一束  
づつ、昼は2束づつ、夕食はい3の3な野菜が  
はい。青草のほかにはサツマイも10kg、人参6~7kg  
ジャガイも12~13kg、乾草20~30kg(各1頭につ  
き)ほかにはリンゴ(3頭で)15kgが1日の材料です。



12月1日 フクロギツネの赤ちゃんが母親の袋  
から顔を出しました。この母親“マサミ”  
は当園生まれで今年6歳になり、今回が



3回目の出産です。過去2回とも順調に  
育児していますので、今回も母親の元で  
うまく育ててくれることでしょう。父  
親は、平成3年に来園したもので今回の  
子供が初めての子となります。

- 12/3. アメリカチョウゲンボウが1ペア来園しました。
- 12/4. 平成4年度第2回動物園技術者研究会が、みさき公園自然動物園水族館で開催され当園から2名が出席しました。
- 12/7. オウサマペンギンの子供が、親からえさをあまりもらえなくなったため、飼育係員が補助的にえさを与えることにしました。

12月12日 ラマの“リッコ”がメスの赤ちゃんを

1頭生みました。リッコはこれが3産目です。父親は“タマサブロー”で来園して2年になりますが、今回が2頭目の子供です。母子は育児が安心してできるよう群れと離されて飼育されています。



- 12/14. ハワイガンの産卵を確認しました。
- 12/15. クロサイが交尾しました。
- 12/17. ブラックバックの赤ちゃんが1頭生まれました。

12月18日 アカカンガルー4頭を、オーストラリアのメルボルン動物園から寄贈していただきました。当園では4頭のアカカン

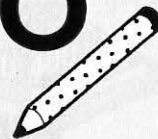


ガルーを飼育していましたが、新しい血統の導入をはかるために同園にかねてから依頼をしていたもので、今回入園の運びとなったものです。

- 12/20. アムールトラが3頭生まれましたが、母親が面倒をみないため2頭が死亡し、残った1頭を人工哺育することになりました。赤ちゃんの性別はメスです。

今月もおもしろ情報満載

## ZOO DIARY



定例飼育研究会を開催しました。

12月24日 アムールトラの子供“カツヨ”(メス・生後8か月)を、中国・黒竜江省にある中国猫科動物繁殖センターに贈りました。



今回のプレゼントは、アムールトラの血統登録担当園である神戸市立王子動物園の仲介により、中国で飼育されているアムールトラの繁殖と血液更新を目的としてお嫁入りすることになったものです。

シシオザルのメス“ガートルード”を本種の繁殖計画に基づいて、白浜のアドベンチャーワールドに贈りました。

12月26日 開園70周年を記念して

天王寺動物園から寄贈された南園出口専用門近くに設置されている小鳥の時計台の改修工事が完成しました。鳥小屋や小鳥の鳴き声の放送機器が新しくなりました。



- 12/28. オランウータンのオス“ブル”とメス“サツキ”を同居させたとこ、交尾を確認しました。
- 12/30. ニュージーランドの鳥、ブケコの展示を小鳥舎からツル舎に替えました。
- 12/31. 保護したタヌキが元気を回復したので、自然復帰させました。

☆テレホンサービス：771-9999

☆お知らせ

- 動物園のおじさんのお話「バードウォッチング」鳥の楽園の鳥と「河底池」の野鳥を観察します。日時：2月21日(日)午後1~2時
- 動物園ボランティア募集 3月1日(月)~3月31日(休)

(訂正) 1月号4頁、赤色野雞と小国の写真が入ってましたおわびして訂正します。1月号10頁著者は管理課：山元貞幸です。

愛ある暮らし、応援します。

# Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS



## 生態・飼育・図鑑が一つの本の 中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光/監修  
B5変型判・オールカラー  
定価600円

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？動物園での世話の仕方は？仲間とは？など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしかいかたシリーズ<既刊本>  
B5変型判・オールカラー・各定価580円

### むしくらしかいかた

野山でみかける身近な昆虫たち  
250種を紹介。

### ちいさないきものくらしかいかた

昆虫以外の小さな生き物を320種紹介。

お求めは、お近くの書店で。 ひかりのくに株式会社 本社/〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

オートフォーカスカメラに

# フジカラー SUPER HG 400

ピントが合いやすいフィルムです



カラの大林

桜橋本店 ☎341-8091  
阪急三番街店 ☎372-5031  
OHVAC店  
(ギャレ大阪) ☎346-7606

全国の愛犬家の共感を呼ぶ無比の愛犬歌集

絶賛四版

# 歌集犬の歌

平岩米吉著

著者が、約四十年の間に、共に暮らした七十余頭の犬の生と死を歌った四百十九首を収録。同時に、その誕生より老齢に至る写真四十七図を収めた、犬の一生の生態写真集でもある。

天金・美装箱入  
B6判・270頁  
3000円・〒不要

《感動の言葉》

- ☆ この歌は愛犬と異体同心の境地である。(英文学者)
- ☆ 人として注ぎ得る愛情の極致を示している。(動物研究家)
- ☆ 一首ごとに、ことごとく魂にひびく歌です。(動物愛護家)

●本書は、書店ではお買い求めになれません。直接当会へお申し込みください。

〒152/東京都目黒区自由が丘3-12-2 動物文学会 電話(03)717-1659/振替・東京5-9800



## マスターのポップコーン



〈営業品目〉 製造機械・保温機 他  
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

(株)増田食品 〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30  
TEL (06) 865-0165

新作

貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」  
19分(10本常備)

- 対象/保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し郵送料480円は必要)
- 申込先/当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード(限定販売)  
好評発売中 ¥800(50度用)

## 天王寺動物園の本

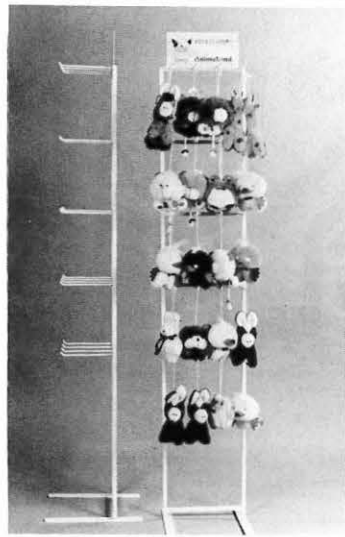
入園の記念・手引に……



オールカラー  
500円

園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会 〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

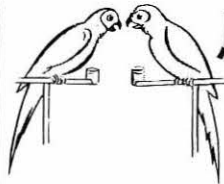


## 動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

有限会社 **アニメランド**

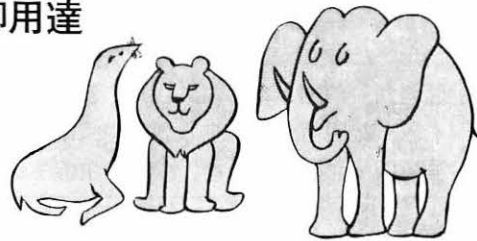
〒547 大阪市平野区西脇4丁目5番22号  
TEL: (06) 704-8580  
FAX: (06) 704-8565



## 鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券250円

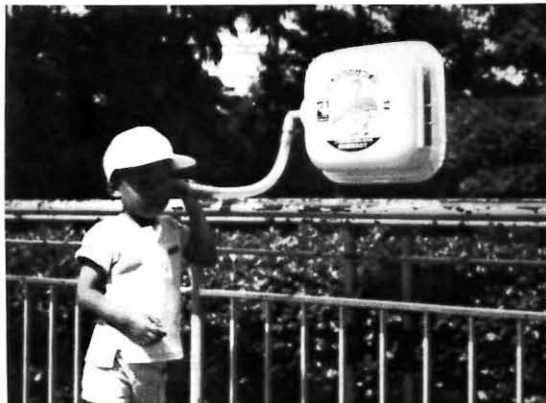


有限会社 **吉川商会**

本社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号  
飼育場 兵庫県小野市来住町1513番地

電話(078)221-8195(代)

### たのしい動物のお話は、 ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!



園内、主要動物舎  
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社  
電話 06-762-2333  
1回 20円

### 動物園内での お食事、 ご休憩は

動物園内.....

## 中央売店

TEL 06-771-0973



### お食事・飲み物・おみやげ

動物園内  
**南園売店** TEL 06-771-7110



### 園内での写真は...

### 動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機して  
おりますのでご説明  
に伺いました際は、  
よろしくお願ひ致し  
ます。

### カラー写真 キャビネ1枚 500円

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。  
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社  
TEL 06-856-7444





Our Yogurt has fruity  
and rich texture!!

“生イキヨーグル”と  
覚えてね。



新発売

いほりたてミルクのおいさが、生きている。

雪印  
**ヨーグル**

希望小売価格 130g/各120円 250g/各220円(税別)



HIJIRI-KOJIMA

一日  
愉快に  
たのしめる!!



◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種のりものがあります。

久竹娛樂株式会社  
TEL(06)541-3938(代)

なきごえ 1993年2月10日発行(毎月10日発行)第29巻 第2号(通巻330号)

編集/大阪市天王寺動物園事務所

発行人/大阪市天王寺動物園協会 土井良彦

印刷所/株式会社 松村善進堂 定価150円(送料共) 1年継続(12部) 1,650円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74

電話 大阪 (06) 771-0201

振替口座 大阪 3-37823

編集委員

(中山真三郎/村上昭/中尾啓一/樽本勲/中川哲男/吉本昌俊/山根和弘/大谷直樹/宮下実/長瀬健二郎/榎原安昭)  
森本委利/竹田正人/永田健一/前田茂/大野尊信/野口秀高/早川篤/堀内智生/大川光雄/土谷正道/山元貞幸)